0 1 2 2m 3 4 5 6 7 TAJIMA 8 9 10 1 2 JAPAN 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3

勸農叢書

養蠶絹篩巻之下

思齋　成田重兵衛著

一抑養蚕乃制度異朝のことハ予ねがハ我朝にて養蚕ノ賦税等乃御沙汰を一ヶ國ノミ廣大無邊の産物を古今民作ノ恐まこなぐら賢君の仁術ちりとそ仰ぐべき事ノ適天災不順ふ〳〵五穀熟らざるハ聖代乃御代ふるなれふ〳〵なのらに民の飢渇を憂ひたまふ仁君あまと病ふ〳〵た〳〵倉廩府庫に積貯へる積粟を以て數千万家

の夫食を救ふに成ぐるつゝまく積
重ねる積粟を限りあり細民等一同平生より
風俗よるまく分相應夫食をまもり備るに限り
なし此風俗よりまに養蚕より能をかゝ其ゆへ
蚕飼をする時を細民すでも一ヶ年の夫食に冬分
農業はゝ春きて園ひおく雑
穀塩噌乃類まで一ヶ年の貯ひ土藏へつめ置おの
ゝら教をまもぐして園ふ事風俗の常とゝ
ひ是全く農業蚕業せるゝ紀時節よそるゝて

いるゝぐるゆゑかりされば養蚕繁昌は國々を細
民までも土藏を所持まくるゝに夫食乃そなつと園
ためふり或人難して曰く養蚕を營む郷まに一ヶ年
ゝの夫食を園がゆふ凶年の度に餓る色あ
此風俗ようにさんこを希とつるにたゝく堯舜の
御代ゝつふる変してすりがゝるゝ餘りあゞは
ゝ利屈に聞へ無理なるゝて嘲笑ふ答て曰く吾
子い未ざ養蚕の趣意に疎きゞゆゝ疊の上の算
用詰ゝ縛まく合点せぐるに至極せり夫養蚕に有

情の活物其日々ゟ業を暫時乃猶豫もなりがたく
手抜ありてハ忽ち損ずるり又其節変ずゝゟ墾納
せずしき事いふも更なり殊ゟ田地の植附未ざすゟ
ざるゟ其内より春蚕盛りに相成績ゝ糸とり右何
もゟ一日延きべ一日の損忽ち目ゟ見えいやが上ゟ
田のゝさきういとがゝく殊更極暑の凌がゝゟ夏
蚕さうに又糸とると追うけゝ世上一同昼夜を
ゟらすゝす右開ヶ敷時節ゟ臨んゝ夫食塩噌の用
意等のそゝなりてハ迚ゝ不捌是がためゟ養蚕

とりてゝるむさゝふを細民ゟでも一ヶ年の夫食ゟ米
変とゝも冬寒中ゟ白米ゟ巻ゝ圍ふ是を節巻と云
右貯ゆうハ白米を元の俵へ入二重がまにしめ堅め
積置バ翌年極暑と過ゝも味かゝゝ米虫虚空
蔵等虫附事少ゝもなゝ甚ゞ重寶ゟり是ゆうゝ
不作の備ゟ圍ひ置にいかゝゝも農業養蚕さ
ゝとゝゝ時節ゟそゝ成ゝ成ゝゆく
ゟり尤最初一年此風俗ゟ圍ひ後をせんぐりゝ
圍ちぬ前ゟ同ト事ゟり適天災不熟の時節ゟ

かゝる數千萬家乃農家うゑ〳〵夫食い圍ひ置米穀高直乃名をぞふ不知安穩なるゝい不虞の譽といひつゝ既う其證據を天明三卯年の凶作翌辰年米穀高直米一石價百三拾五匁ゟ又天明六午年凶作翌未年米一石百八九拾匁より貳百目又其後子年中國西國雲霞虫增長して翌年米直段百目右等の三ケ年ハ古今の飢饉とゝなへ諸國の細民死生存亡ゟ繫わゞの大變なるゝも養蚕を營む國郡ゟ幽谷海隅の細民ゆゞも一村一家も助命の恩銀借米等の御沙汰をきゝ泰山のゆゝしきふ居を例年夫食の手當をなし置ざれバ災〳〵捌ざるゝが故ゟうゝと慥なる證據とゝなるゝ

一百姓足を君ゟれと俱ゟ足らさゝん百姓足の急務と成を地より物を産なるゝより能なゝ物を産なるゝ何ぞや萬物を撰んゝ推量るゝ凡養蚕ゟり所務多いなし蚕業ゟ二季なり所謂春蚕夏蚕なり此二季の心得ハ前編絹節乃折本にゝゝく記を さゝく来を摘を役とする木なゝゝ故ゟ不摘いゝ

て所務すくれしたるい一反の桑畑すくに春蚕ゟ摘
桑二百貫目のもい夏蚕ゟ摘ぎ又二百貫目のるゟ
のゟ二季合く四百貫目ゟ有るゟ春蚕ゟつゟ
そして夏蚕ばゟゟ摘ゟゟ更ゟ所務多うしかく
つく明年木の為ゟ格別乃損ゟり然るゟ唐本
農桑要集乃書ゟ夏蚕を飼く二季桑を摘時い桑い
わくく明年葉茂らぬと書のくもせしい農業ゟ疎
く桑を摘を役とするとゟばる誤ゟりとくく書と
信ぜぬ書ゟゟゟ有るぞとつふい此類ゟりさて伐桑

ゟく春蚕ばゟり飼所ゟり又夏蚕ばゟり飼處ゟゟり又
春蚕ゟ諸蚕を飼國ゟゟり諸蚕をなり蚕ゟ蚕ゟねを
ちるのくを主くちるのまて糸真綿ゟ有ゟい格別の
損ゟり是等乃類を其地まて開闢せ仕法の惡習
ゟく今中途ゟ改めかくゟゟ一季ゟ二季ゟ諸雜具
萬端同じくゟく二作乃所務を一作ゟく捨ゟゟと
不益の甚ばしき是ゟり過ぎるゟ諺ゟ先入を師
とするくるゟもじめ開發の一癖千歳の後まで
一盲衆盲をひくゟ誤ゟゟ是ゟゟ

一夫養蚕とまるあを先所持の桑何ほどなりと法のり蚕卵を内端より蚕飼をべし粮乏しくても全きあらを得す一枚乃蚕紙あるも數千無量ゝ數虫とるりしゝ我家あるゝ生をたるゆゑ撫育乃春属なりと心得べし常よりおりんまるゝるゝ適雨あるべき年ゝゝ桑葉に病ひ付まる旱續きの年ゝゝ葉盛らぞ此外桑葉と虫巻ゝなり臨時乃天災を人力の及ぶゝゝゝふなゝず所持乃桑ゝゝ粮乏しからぎるゆゑにあるゝあるべし

一室ぶゝと藁た籠るゝゝ蚕のゝにゝとあらゝまる雑具ふゝ外の用まゝ成ゝゝ其嵩なる持扱ひも造作のゝ多ゝ不便利なり又蚕下をうるふ縁なるゆゝ網を用ゐゝゝゝを蚕を行義正しゝゝ外へ這出るむゝにゝゝゆべ縁をゝゝるゝゝさて鈎棚をさげ筵まゝ養蚕いゝゝせい持扱ひも格別無造作ふり取分筵を平生農家ゝあり合を雑具なれべ熊と拵ふ無益の費もなゝ又網まゝ蚕下をかゆゝふ二人前の業を一人あゝあるゝあるゝ面をゝ

するのなり又蚕自然う揃ぎるとなく網あく
直せば是又無造作なり此得失容易なる一家改
めて一家のたちけ一村改べ一郡あうつり壱ヶ年
乃得失數年を積るべく廣大の助と成べし然るあ
或人曰く信州を山深き國ゆゑ室ふるの縁なく
寒風をしのぐ助とするなり又奥州も寒國なる故
極暑乃節あり深山乃氷を取て市よ販ぐの寒國
ゆゑ莚あてん凌かるよるべく藁ぐの縁なく寒風
を凌るふ是を論ぜるふ一應を道理のゆうあると共

蚕を有情なる故暖國なるべ八十八夜より十日も
ちやく生をまると寒國なるべ八十八夜より廿日も
過て漸発ぜ芽なるふ食なるとなのまとなる
て生を出るなり右三十日の遅速あるとなる陽氣
乃寒暖を却て人を不知なる天然自然と蚕を覺
蚕卵の内より生を出るを昔も今も時刻をなるべ
莚乃縁なる室ぶて藁ぐ縁なるて蚕飼乃ためな
善惡をいろい卑竟附會の説なて信するうたて
但寒暖風土の差別を出産遲速乃ちがひにあるて

繭ふるるまゝ惣日數を元を付まもると落居まゝ

一

一 糸取竈を塗るゝ底のなき桶乃形と圖乃ごとくか
ゝるとの きゝ赤め中へ土と積ゝ塗るゝ扨一兩日乃
かゝゝめ板の雛ゲ ゝとあゝ口と切るゝ但土うきゝて
炭火のゆめ化するゝゝゝ故土薄きいあゝ

此ゝゝ積置ゝ賣ふゝ

一蚕紙乃置所すて出産の遅速をなすい肝要の作法なりそを蚕紙を一つのつめふわきたい蚕一度よ出産するゆえ盛の時こいるとたゆるがいるかゝ守護ふまぐるゝ紙のるゝ是ふ依ゝ日と違ゝ追々ゝ出産みるゆうに蚕紙の置所よ寒暖あるゞゝ譬ば蚕紙三十枚飼家るゝふ十枚い家内ふ釣置まゝ十枚い一層さむき土蔵なゞゝ釣置のゝゝ十枚を高山などゝ寺院へ預け置時を出産の遅速五七日ゝゝちのふゆのるゝそふ丹州あたにを年々妙見山よう十一月の頃ふ至ゝい蚕紙をなつめふまいゝ名所を書るゝ置翌年八十八夜前よ蚕紙主江配る事なり養蚕繁昌ふ祈禱料とゝるゝ持次第の世話料を收納ゝるゝかゝゝ出産の遅速あらゝ糸ふ繰ずで日數順々にるゝ甚ゞ便利よゝ此故よ家々ゝ分限よ應ゞ蚕飼の多少にゝらば盛の一度よるゝざるゆうに心得有ゞゝ又冬より蚕紙を箱よ入めたゝしゝて遅速をふゝらゝ盛一度よからるる様差略あるべゝ

一前編養蚕絹節乃折本に桑の善悪の種類あるゝ所務と損益なるゝと記し置ども魯桑の中の葉の大なるのゝを利益あるとするあるいなるべし癖なる紀魯桑は必大切なるものなり其有増を論ぜば雄木あるは花咲ゝ芽立遅く春蚕と所務少き癖あり又早稲来は春蚕と所務多くなれ共真芽立ゝ紀癖あるは木も夏蚕と所務もゝ多し又葉のなるは遠きは所務すくなるべし木は摘ふ障入此外さまゝのゝせあるべしは少びらゝふ書尽しがゝ桑は一年限の所務となるべ

年々毎と損益なるゝとゆゑ能くゝ考へを吟味しゝ苗を作ふ事かゝるとぞゆるせふもべゝ紀て桑を植るふ國々土地の厚薄と順ひ木數の多少心得あるべし土地厚き上畑と一反と百本と大木と茂りて後所務多くなるゝなるゝ土地うすき紀下畑と一反と九百本もゝゝ木數ふゝ所務多き心得あるその國々土地の厚薄と順ひ木數乃多少なるて損益を考へるべし前編絹節の折本には一反に三百本ゝへとあるゝたるは其なるゝと書あるせしのゝかり

一蚕を薪よあげ時刻を經て後薪葉をとる國なり
此薪よけ乃時を央繭をはくるもなりまさまふ
繭をはくらんとするもあり或ふを薪よけふなど
ろまくく繭全くらぐるものあり此費をくるおうらは最
初生きもどめーうを切磋琢广の心勞はのりく繭
一段とふりあまらら乃不益りかくるとを誰ら改め
さらん蚕をなくるいい藁の宿より好をなーまめー
まくんぐ考ぐーこのあくぐ莱を掃ぐらなどくをなぐ
まぐを繭なのく糸目少く変して損ふり

一枚のむーろより走り蚕五七十拾ひ塩合をくくく網をうけ切桑をうすく喰せい蚕あくの上ゆのぐまるを小口ひろくをひろくなりあくあく隅るゆ蚕下つくを半分手間まく便利くぐ

宿をくーらゆる圖

うい棚より宿をあらる圖

いこをしゆく入る圖

あをしきをひろふ圖

一夫おのゝえるまい諸國よりかゝる一國こゝに國産と称美出るものの養蚕に限らず數かぎりなき産物ゆゑ開闢手製のもゝめ悪習に馴こゝに終り遺風の癖となりかゝる陋しい更に改めゝるまゝ成ゆゑ此ものゝ殊更糸を諸品の中なる上品あるものゆゑ能と悪敷い直段格外乃損益あり必ずよく師を撰んで見習ふべき事肝要ゆゑこゝに國に國風あり儒者に學風佛者に宗風家に家風あり糸と繰るゆゑ又國々の風義區別あり雑具なる種々あり其中に

大繭と小繭とを分て一集に取ごみ糸ふらる
土地あり但し取込るゝ節多くして上糸なり
このまゝ却て其業むづかしく勞して功なき一僻あり
万一大繭を一ッ交りても節出来て直段下直なる
り大に損あり糸を第一節をきらゝゆゑ大繭を見
損じなくゆり撰ゝらるゝ第二まい撚る糸を平
糸とるゝなり又糸の附口を往といふ此附口と
上糸とを一集に繰馴るる惡習なり惜むべし其外上品
下品をも國風り深たるゝせい千歳の後すでも改め

かゝらるゝ牛馬をせめるゝ止といへるゝ化
行動といつべ止ふ後世の后すでも止動なのあり
なのゝまめがゝる同然ゝるべし
一糸取鍋を二升焼に限るなり就中古鍋を用ゆべし新
しきに鐵氣に深ゝ直段格別下直あり鐵氣ハ飽ま
で嫌ふ事あり此故に古鍋といつべも毎日奇麗に磨
き持扱ふに鍋炭の手ふ付ざるゆゑにべ三ッ足鍋を
みべゝに妨と成申る足るに鍋を用ゆべし尤煙を忌故炭
火に限に少にても鐵氣の糸に鼠喰ハ半直段にて買人

春蚕い
あぐらる
日ふり五日
繭を
かくるり
夏蚕い四日めふ
ゆをとるふり

繭を
端緒圖

江州近國にて成らけ生まゆを多く糸にとるなりあし糸取人数不足にて取得ざる分ハ炉にて煎あるひハ筵を見を覆ひ日にほすといへども一日にても日増になりてハ糸口よろしくなく格別ひけなり其上色つやあしく糸目すくなく損なりよつて日まし不なしざる様にすべし

東國筋ハ養蚕おゝく人数の割より繭多く容易糸にとりつくしがたく依て生まゆを何くまでも貯へがたし俵に入てかこひ置農業のひまし又ハ冬春までも糸をとるなり此上手にあより取得ざる分ハふるまゆになるゆへくさる事あり尤もまゆそのまゝハ益あらざれどもゆゑにもとを得ざるハなり但しまゆいとにとりたるとまゆを日まし不なるとハ損益ありしくあるべし

糸をかるを圖
糸目
十六七匁
一とすること
大ろくうつる
糸をけわしくする圖

大ろくに糸をうつを圖
糸口の切るを見出を圖

まわり仕立る圖

まわり圖

ちりとり圖

灰汁たる圖

一糸を繰る井戸水あてい糸剛くなりくらうしからば流れる水あり繰む屋もらうあり去なるら雨天はなはだ川水濁る時を是非あり井戸水を用ゐ糸も清濁あて上品下品のらもを直段も格別損益なるなりまもひ遠方は水をらむもる糸取一人前の水一荷あてハ足るべしかるべし苦労なるもいはかるべし清濁り心をはしゆあるせるすべし

一生繭あり糸る繰得さる時を蚕をあげたる日より春蚕ハ七日め夏蚕を六日めふかもり繭を炉あり

煎圍ふつ尤も日數を經り糸繰乃湯あるる時を
いふ裏つきり色ものある故央ものたるもの湯
をくらるべし糸取人數り應ず鐵氣なるかも
あり別り湯をたるらもかり湯の用意置べし

一天下の奇品邊鄙る産るもの多し其ものもを
つづる八丈が嶋り蚕飼をして八丈嶋を織出をもた
蚕業にうもるべ越後縮或を薩广乃上布美濃ゲを
つづる山家邊鄙の名産其地の國益と謂つべし

此類擧てゝ〻げ〻〻夫經濟ゝ心ある人國ゝいづ
もゞ名産奇品を工ゝ出そのゝりその濫觴をいつも
奥州の糸并ニ本場蚕紙防州石州紙紀州の砂糖
此外諸國の産物ゝる近世開發の品々數多く〻〻
是又記ふ遑あらぞすでゝ百年已前五十年以前
までい曾くゝるのゝ〻〻産物〻〻諸國ゝ多〻〻又織ゝの
類ゝ〻〻上州乃八丈江州濱ちりめん是又五七十年
まつい更ゝ〻〻〻産物ゝる當時天下の名産と
ゝ〻〻と諸人ゝる所ゝり其以前經濟ゝかゝ〻ゝ

人其國々にゝりせい斯乃ゝ〻の名産奇品いつ
乃世まゝる出ま〻ゝら恐るゞら治世乃急務ハ土地
ゝり物を産ゝるゝり能いゝ〻是を撰むゝ万物の
内糸真綿ふ勝るゝのゝ〻〻又廢地をひら〻〻ゝ来ゝり
好いゝ〻〻國を留ゝるい養蚕ゝり所務多きいふ〻
或人曰く名産い國ゝいつく出るゝ人ゝいつく出るゝ
何ゝいつく國を富ゝそゝつり答ゝ曰く往古孔子
衛乃國へ適のひ〻〻時農桑の業をゝ〻授く國を
富ゝるゝと先務ゝ〻〻又近世清の康熙帝ハ耕

織圖乃書を製述し官女よ養蚕をつとるみのひ
よ荒亡乃廢地を自然とひらるゝ國用定ると
なり然まべ名産奇品い經濟の人よ産るゝ必定
せり此理をゝ〳〵かんがへなるべし

一夫蚕を諸虫よ秀ゝ綾羅錦繡の貴品を工みなせる
蠶虫ゆゝあゝい喰ひ子ざまべ嗟來の食を貪らべ
ゝひ死よ望むゝ桑より外の食を不食あまさ
さゝく盗泉の水ハ飲ぞゝよ類あり無量の數虫み
なゝ行義正しゝして一虫も已が座を動ぞ眠ゝ一同

り眠り起るとゝ已ハ又一同り已桑をあゝつゝひゝ
く喰ふ嗚呼天然礼讓を備つる蠶虫といひべし
さまべ養蚕と營む人ハ常よ蚕乃性質に心と尽しく
寒き時ハを家内とゝなゝめ又暑ゝ時ハい家内り涼
しきゝるゝを儲或を食乏しかゝるゆり蚕下ほめ
くぞうびさる様り万事ハ心を尽し我撫育の眷屬ゝ
と思ふ意を忘るゝゝ養蚕ゝさべ家を富をと
疑ひなゝ是又諸國よりゝ蚕業乃家々豊饒か
るを見ゝ證とすべし

一恐るべき事に恐るべきものゝ又恐るべきに却て恐るべきものゝ蚕業に此類多くなる事ゝ其一二をいへば聊毒に成るべきものと無量の毒忌に成るべきものを種々乃吉凶をのゝひ又墓所に桑を忌ずゝ知らぬことゝ忌嫌ふ類を是等を恐るべきことゝ恐るべきものゝ又臨時乃不順あて寒暖晴雨に心を用ゐぞ又いきりほめ或を蚕下のこのびふ心をうけぞ桑を喰ちふ折々怠り終りに仕損ずるものあり是則ち恐るべきことゝ恐るべきに乃失ひ右等の心得前編

絹節乃折本に委しく記せしに因て猶又爰に諸人の惑を晴さん爲に證據を引く次に云ることゝ必迷ふべきに養蚕を活物なる故聊あても迷ひあるに千變万化に心をうばはれて金を以て佛をなる人是をうばはむ金を以て鬼を作る人あるを怖る是皆まどひ迷ふに佛も鬼もうゝの金に蚕業と吉辰良辰を為らべ生老病死終に障りと聞す運不運をいふの大器愚俗の迷かり惑して蚕の善惡を守護乃行ひに限る変断あらべ

一早づけいのものを
ゝらかゝ蚕のうむ
ゝゝゝ世上一同上
作ものゝるまでゝる
あまりてゝゝけば
桑を汁ゝるゝゝ
かゝゝゝ糸目ゝゝ
あゝゝのゝゝゝふ
雨露のめゝみをな
ゝてゝゝゝのゝゝ
ゝゝ桑を毒ゝゝ
ず蚕下ゝゝゝゝ
ゝゝふゝゝ

霖雨の時を圖のゝゝ庭ゝ灰火をたきゝゝゝ
けの四方へむゝゝゝけゝゝゝゝゝゝ四五十
枚造作ゝゝゝゝ物ゝゝ

一焼火ゝ冷氣をあ
ゝゝめかゝゝと主ゝ
する物ゝゝ蚕のこ
のむ藥ゝるゝゝゝつ
ゝゝゝあゝゝめすゝゝ
い却ゝゝ病根ゝゝな
ゝゝゝと用捨ゝゝ
ゝ

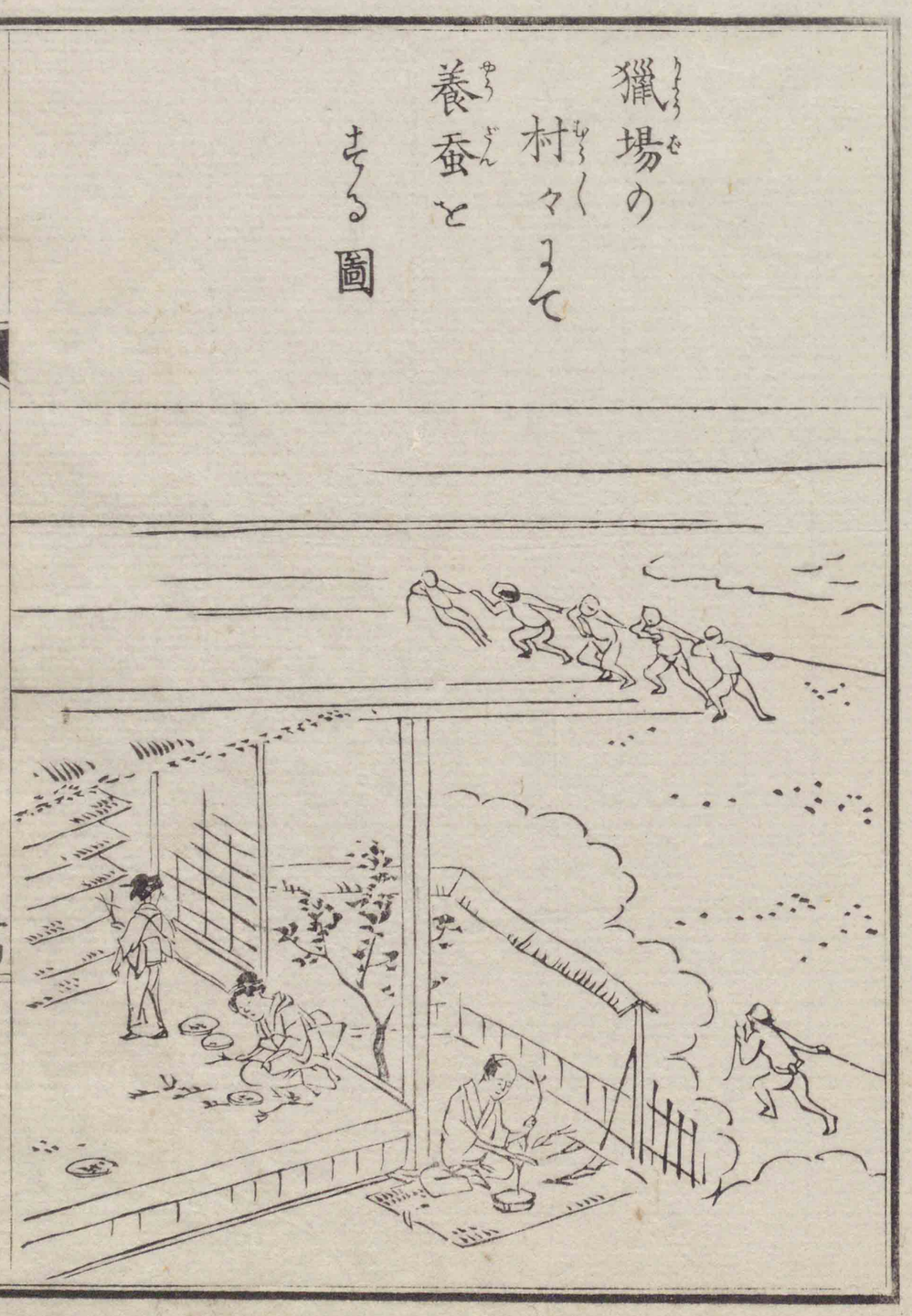
一風ゝいゝゝゝめゝ
ゝゝゝ諸色をかい
ゝす物ゝゝ蚕のゝゝゝゝゝ蚕幼稚のゝゝゝゝ冷氣家内へ
いゝゝゝ人のゝゝゝ凌ゝゝゝ昼夜紙帳を張ゝゝ守護ゝゝゝ

孟子曰不爲と不能との教訓ありたるを五穀出穂の世に自然大風吹倒或は稲乃花はのりに晝夜冷雨ふりはぐきたる天災を人力ふるくよるもんとはつもるる廣大無邊乃野のそぐに稲なきべ不作なるるもも力及ずず是不爲まあるべ不能の天災あり又蚕を家内に育つ虫なるべ晝夜霖あめつづくもる天災を蚕乃嫌ふ毒なれば世上一同不作するのなきもども此時人並々ふく不作なるを守護方便のたらざるゆつるり圖乃ぐぐ庭り炭火をもくむろ網

をもく乾くく飽まぐむろ網ともはくくとまるく一晝夜ふ三度も蚕下とくまる雨天の濕氣を家内へうけざるゆうに遠火をたきく自然とかまかくまとつづ幼子を養育するおくくむつきをとくく不淨を清むふ心くく守護りかくもるるい世上一同不作なるるるかるるべ上作なるるあと疑ひなるべくべされば濡桑を毒よりらす蚕下の濕を嫌ふまあるりあまるるのさうひ分別くく人並々ふ不作なるるい不能あるをなるら

丹後の海邊
漁場は北海
の潮風
養蚕ホさせ
る事
圖を見る
ごとし

獵場の
村々にて
養蚕を
する圖



一丹後但馬乃海邊を北海乃潮風からく殊ニ漁場の村々を例年蚕室ちろ紀なりく干鰯をほしあるひを魚乃腸のくさりたるその惡くさきこと日々まくづたき事あり別くく文化九年甲三月より八月まで古今めづらしき大漁まて漁場のふぢたひ大方あらぼ干鰯の臭氣魚乃ちくさりたる臭人をうるさくかくつぐも蚕を少くも障らぞ二季とも無類の上作ありさまい家内ふく魚鳥乃類を煮きたるまぐかのうぎと輕重乃類をおくかんごへるづくとき

らちさのくもを分別くく無量のあとりすまふ屋こうらず

一夫醫業の家うへわのづから藥種乃ふわひ家内ハ薫すちのるふ醫師乃家まく養蚕をるふいさかさちるるくはでふ予ゲ弊邑并ニ隣村乃醫家數代養蚕をいるふむとくづも終う藥種乃さとりと見ぞ或人評していちくうとうまとめくよる香ふうまるゆへ忌ざふのまといふりのふりてい此道理ふたふくをたりねども一ぐりまくぐ

古乃評信じがたし實の毒ともいきをあのれふ
ふきたい馴るゝ事あれ更なるべし妄談を信
じて守護り怠る事なき

一牛馬乃部屋家内ちかく昼夜惡臭家内ふかく
もつてかたりなし牛馬乃部屋と同室にて
例年蚕業仕來る郡村をたゝ證據とすべし

蚕一僻ゝ屑乃名寄

一都て萬物ゝ多少なるゝ屑出來るものなりなゝ
べ米を人命を扶る貴ものゝ猶苗代のゝたレヨロな

り植てのちイモチ。カラクタレ。ネムレ。ハムレ。ウ
ンカムレ。ミヨサレヽラ。コクウウムレ。ユメムレ。
など多少屑をなる物なり養蚕まて然りテノ
コリ。フレタカ。コレボソ。ヒカリ。イズヌギサゲク
イドヲリ。タリコ。ヤワラ。ヒヨツトヌケ。ヒラバリ。
レヤリコ。レミブト。などの名なゝ上作なりと
も多少なるのゝ屑をなるものなり右農桑なる一
生老練たるゝ何等乃さもとのゝたゝろ
を用ゆる人なゝ但稲を非情乃守護なり

蚕を有情乃守護少其性質五禁の失りあるとるもの一僻ゝ屑れ名あり蚕業をする人應報乃いづるかたちつよ考へならび守護のたちけとあるへきこと

一　テノコリ蚕紙より出産の時蚕卵の内よ居らりて生を出ざるものあるをと出残りといふ俗とるつゝ蚕紙乃ゆきとゝふ誤りかりたとへハ鳥よ巣守あり人よ子屑あるをむづるこゝな蚕卵數千無量乃内をや

一　フシダカきのふまでハ何をもフシダカよあるや否哉の兆しハるゝぎをどるをもちまちるゝハフシタカクみり惣身より白汁出桑を喰得ぞ短命あゝゝ死す此病性數虫りうゝ疫病乃ゝゝ療養乃ゝゝそゝ紀良法おし終り棚を尽しを水葬をるれうきをひよいるゝ但しフシタカを指りさをりてゝ白汁出ずるコシホソを振拂へしるゝ不離病性表裏のちこのひかり養蚕をいるゝむ家りい常よあをとおりひおのゝ止ざる時を不中とゝ遠ゝらぞ心を

はきべし

一コレボソ蚕を馬乃頭ヨ似ル尻ひらくを最上とす
然るにコシボソを何ゝるゝ尻わるくなる病性あり然
も桑を喰ふこと常のごゝ壽命をたもつべし
終ヨちぐと死も此病性まゝ數虫ようまべきもの
ようゝ今日ゝ翌日とぜんぐ多くうる療養桑ヨ酒
を振或を蕺菜和名ドクダミ一名ジウヤク又を蓬葱などを桑ヨ切
まぜ秘術をはきといつぐる腹心乃大病治しゞを
きりのあり右フシダカ。コシホソを壽夭反對の大病ヽ

おきを蚕種乃何ゝといまゝ一枚の蚕紙を半切ッ
二軒ヨ分ゝ一家をよゝを一家を捨るこゝのり又
天災といちぐ一郡一村數を尽くゝ捨べき筈あり應
報のつまびらかなるをありがたくうたがきわ
あぐらゝ欠ゝ後の老甫を俟
一ヒカリいきりほめ紀さめざる莚網ゝ尻をつかか
又ほめ紀冷きる桑を喰せば忽ち蚕のかゝらヒカリ重
きりのい暫時ゝ死も軽きりのい壽いさりてぐも繭
を作らぐ是をヒカリ頭痛ゝるゆむと知るべし

蚕乃性質乾を好み濕るを嫌ふこと丁寧反覆しく
絹篩より飽まくまるを置くとも常より冷き莚へ尻
をくつめたき桑をくらせを終りのきこいふ
殊う夏蚕を動ゝきびし西南風にて蒸暑くつゞく
雨天はぐき膏汗など出る惡暑にい蚕下ゐめ紀又い
莚の赤めりを嫌ひ暫時う痛と損ふ事なり必昼夜
に三度も乾くる莚へ尻をくく或を昼夜戸口をあけ
ぐく紀備を儲くく蚕の性に違ず懈りるくいたくひ
いうほと濡桑を喰ちを変くく仕損ぐいなれりの

かゝるぐを守護に怠る事なるを

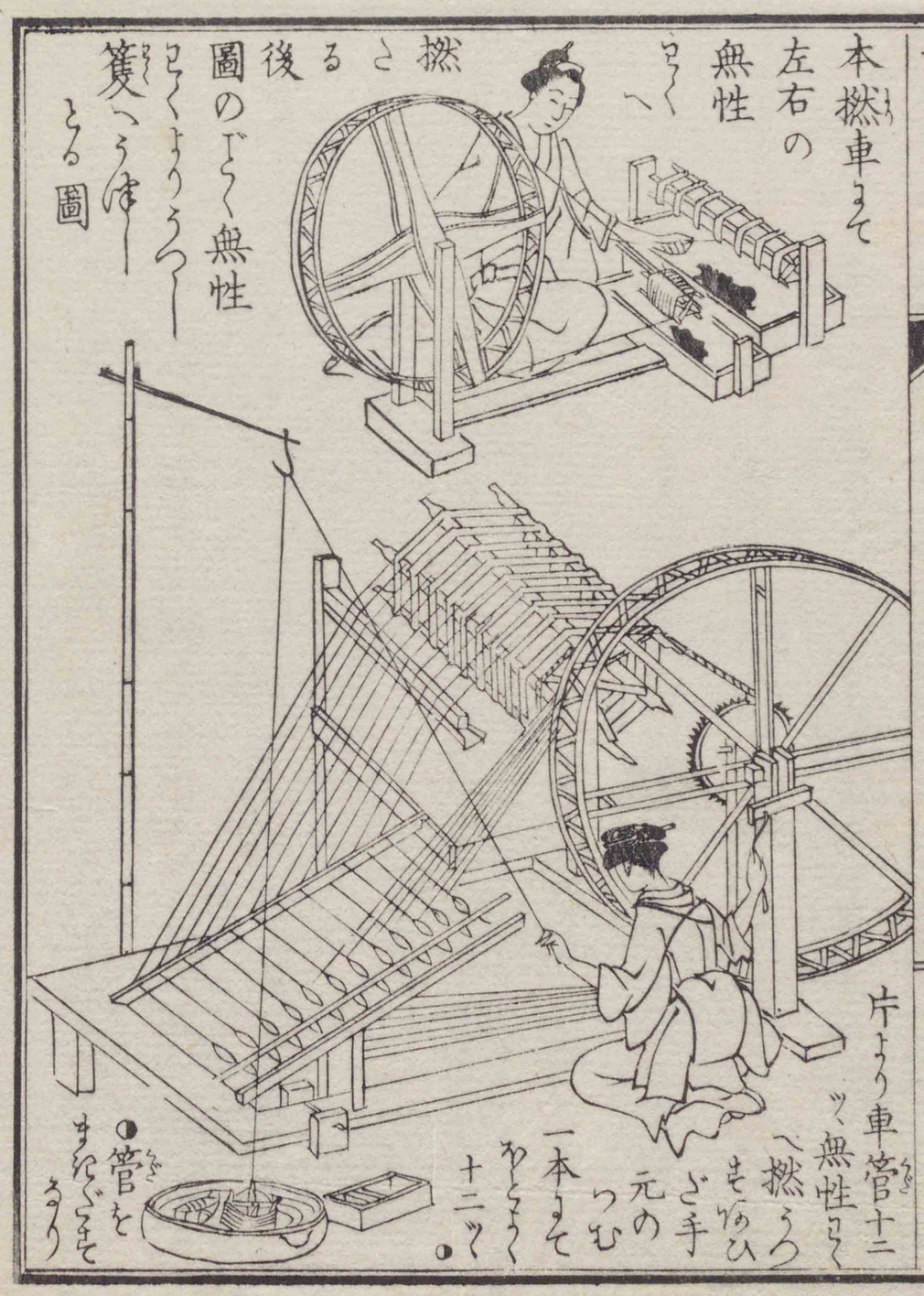
一イズ獅子一度居　鷹二度居　船三度居　庭四度の居起の折節に寢起と
せざる自墮落りのなるをイズとなふ惣して其
家職に居くく其職になられりの國賊なり汝不聞
や物くゝお其要を主る所あり目をるるなのきちろ
ろり耳を聞に賢くく鼻を臭う覺し齒い打に宜し
心を用るふ才能なのらるを身躰手足を働に健く
ちるるに汝ゞ放蕩時きるをゞる寢起をるきゞ食
を終るれ間るを外へ這ぐる放逸乃性なりるを上

ふ居く心を用ざるべ下情ふ疎くく民産業を安
んぜぞ又下らして放逸るきべ佳名をゆぶり甚ぶ
きい國法を犯ふいるかるがゆるふ世俗よ所謂骨
まで穀盗こいい汝ガ類う古今養蚕を營む國よい無能
放逸の人を異名してイズといひく世の人乃戒とた

一
ヌギサゲ起るとたふ腰のあうり衣を脱得ぞ桑と喰
つぶも糞つまりたるこ死する虫あり是をヌギサゲと
いふ病氣うたるべ放蕩うたらべ天命自然の横災
なるう善うか吾子ガあるひ独り死よのぞくく更

ふうらくこぞ人を難よたうて能ものく
吾子を自業をきりて禍ひを數虫ううきべ命か
るうか此虫ふくく大乃苦くたりあの虫ふく
大乃ムくたり

一
クイドヲリ庭乃居起をきべ微功をいたぶく先
輩に先達ゆきうんといらちく極小繭を作るもの
たり是をクイドヲリといふ虎を画く不成猫よ似ものに類
う吾子幼ふく賢くく漸長たりて已ガ枝藝乃習
熟を不俟然も名譽を外よ求虚名い君子の恥る所く

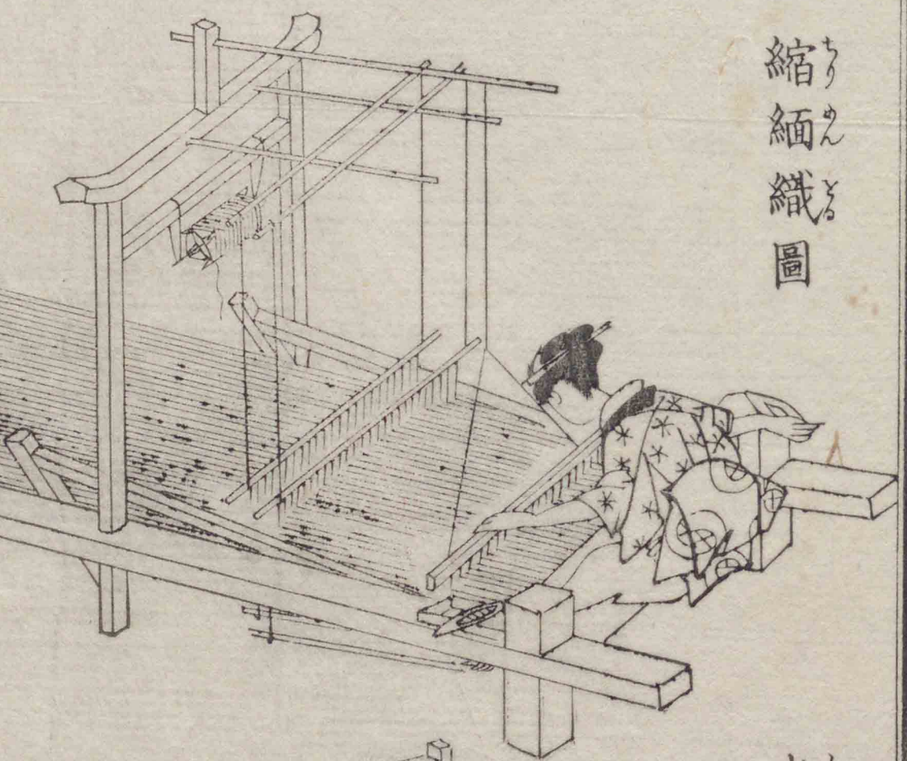


本撚車そ
左右の
無性
くくへ

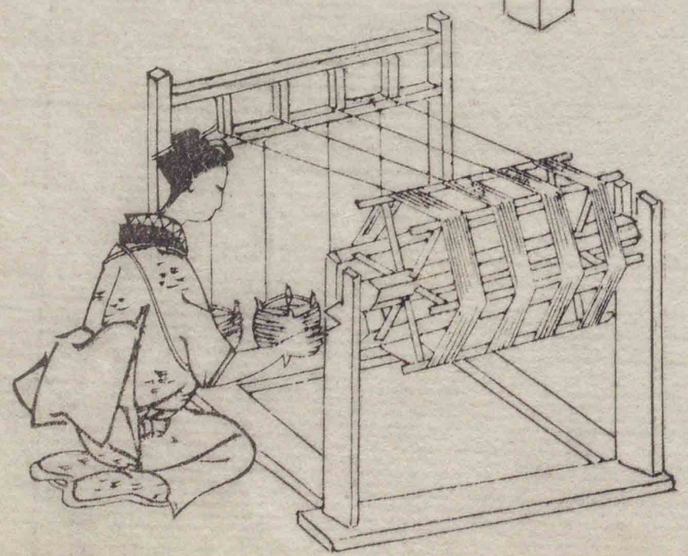
撚さる
後
圖のごく無性
くくくくく
篋へうま
る圖

片くり車管十二
ツヽ無性くく
へ撚うろ
もなひ
ご手
元の
つむ
一本そ
くくく
十二ツヽ

●管を
まきぐそ
くり



縮緬織圖

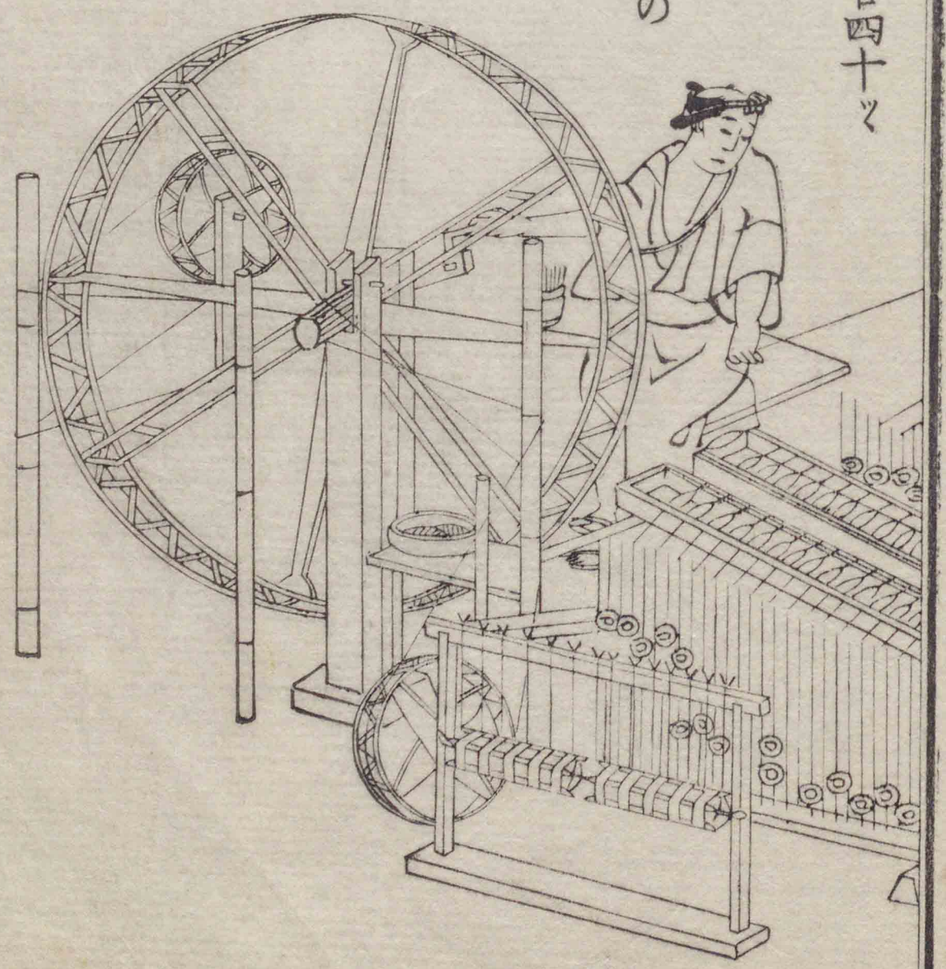


水操篋移圖

右撚の管二十　左撚の管二十
都合四十の管を左右の
無性ゑ〳〵撚うゝ〳〵都合
四十の管滿る間ゑ手本の
はゝ壺本ゑ〳〵ゑ〳〵
管四十をゆ〳〵ゑり

此撚車の濫觴
我朝の製ある哉
又唐土よりゑゑゑ
ゑ哉其ユゑゑ妙ゑるゑ

一本の真木ゑ管四十〻
左右へゑゑゑけ
ゑゑる撚つゑゑだ
ぞよゑゑゑゑ又糸の
りつゑゑゑ〳〵始中
終滯ゑる紀ゑゑ
ゑ紀ゑゑ〳〵俱ハ
凡慮の工ゑゑ
あゑゑず嗚呼此
人の姓名深智
後世ゑ朽ゑゑ
ゑゑゑ〳〵ゑゑと



一タリコ放蕩ヨ食を食ひ飽まく肥太り繭を作る時ヨ臨んぐ惣身膿汁とふりくまを死すあまを多りコとりふそを百病を口より出るなりこまを人事ヨなぞらくいたぐ汝口いやーく人の賤こ嘲をそぢぐ臓腑のくまくふまで飽食しく終ヨ父母ヨ受る身体を傷る此罪一ッ又腐死く惡臭鼻を覆ふ此けぐまを惡て尸を竄を地ゐ乃ふ至う猶禍を種の素性ヲ歸を嗚呼是何といふくぐ此罪二ッ又常の産る紀時い常のあくあ―汝ゲ容貌盛壮ふ―く終身尺寸乃糸

を出さびいのゐる蚕業老練の人ゐくくも汝を相して豈不誤ものひくんや此罪三ッ口を以く欺くりのを譏佞くのひ貌を以く媚るのを面諂といい汝ゲ風情數虫を欺き死して後までおのゲ膿汁の穢を以て禍ひを類親乃繭ふうつを明ヨ害るのい猶防ぎゆをく暗ヨ損ふのい測ゲく此罪四ッゐくふを汝何を足うくく自号を足蚕と称くく言外ヨ驕る傍若無人此罪五ッ嗚呼後世芳を千歳ヨ残をくいあらばくも汝ゲくく臭を万世ヨ傳んくい恐るゲく

西陣へ糸運ぶ圖

諸國より京都へのわる
數千駄の糸荷を京都
糸問屋十八軒へ買うけ
年々養蚕豊凶にあるべし
糸直段高下は准ト代
銀仕切目録を以て荷主
へ勘定致す事ふり
右糸屋町八丁の糸仲買
へ買取又西陣數万軒の
織殿并組物糸商買中へ
賣捌く事ふり例年糸
問屋十八軒より賣出し

正月廿六日　賣初
七月八日　賣止
七月廿六日　賣初
十二月廿一日　賣止
右年中糸屋町八丁の仲
買より日々糸問屋へ
買付の糸を毎夜糸や
町へ持ちぶる十三貫
目より十四五貫目を一
荷ずつ箱挑灯ゝ問
屋の家号を書しその
わかぶでしき事なるを
書まぶる

一ヤワラ生を初しより飲食起居數虫と共に節度なく終身毫髮の過をなさるゝ蘭を作りて全躰なるものを時に臨て形のを作りて終るものなりあまりをヤワラとのふ吾子を一才一藝なれ柔弱自棄の性なり吾子ぞ紀明なるふ獄疑きい従去るふ賞疑なく犯に従へ子なるに去ぢらく此語に泥んで一生捨扶持の役害なるべし

一ヒヨツトヌケ十分奇麗なる繭央をつくりなでう飽て繭なりぬきのでヌ又繭を作り幾度なるべく繭をぬけいぐ

其うちふ糸の元手かぎりなりて終に無宿なるもてるむしありまをヒヨツトヌケとのふんぢ才能一端なきふあるべ物に飽乃一失改ぐるに彼完尓とゝ答て曰く我黨乃商人に屢々飽るを商買を改そのうちふ元手を尽さるものなりて婦人に容夫奉公人に主人ぐ大黒を愛し開院しる僧あり我常に朋とゝと云々汝ぢりふ多言なるおとなりて汝を公聽に達せば類中集ゝ迷子乃ヒヨツトヌケやのいと呼に迴ゝやん

一ヒラバリ一得一失進むを知り退くを知らず爰ふしラバリとつふりのあり剛欲なるもの人並あらい氣にたらぬ分限り應ぜざる家宅を驕り經營をひろくかまへ其うちふたつまる糸尽く無宿を果るものあり是全くおのが智愚をもつらぬ度量をあらぬ始をあり終りまりとらず乃僻あり吾子錢乃たらちなる繫ぐを刺の長らざるをうらみく尻をむすびざるを失せるをしらぬ古語あり直言友なし濁言衆人愛を恕るをなるを予吾子をせむる直言をりつくす惜うる吾子がおるひ終をつゝむことをもつめのごとく爲なるべ汝がおと犯悔なるべん此故を太義とあるべきの一事を忘らんぞをつたらおまをもつるぞゆつふ事なる人らして万事をかゝおぬ犯りのあらんやのあるべあやうし吾子が剛欲米の相庭をかなら法法しるべ

一シヤリコ蚕を繭を作ると已が任をあるべ出るるふ乾物となるく終るものあり舎利蚕とふ形

拈骨のごとく藥店より走きび中風病るかごつのき
あざるを白姜蚕とゝふいのゝ一つより不生不滅の
類を多くいつども生あるゝ死るものをかつく
きうずする肉あるもの死くゝ爛きざるちゝ
あるのゝふ吾子を生ありて誰りたんゞゞ終命とゝる
あるゝ〳〵いくんぞそのゆゑをきうん怪むゝとなれ
我等蚕よりはるゝ時君ゞ昼夜の安養朝暮の深切
謝するふ言るけをども折々五禁の毒にあうゝ
きくかゝのごとのの病根を我りこゞらぞ向後五

禁の毒をかゝるゝばゆゝゝ
一レレ十分繭をはるゝ繭乃うちあゝ腐死を日を
〳〵膿汁糸乃湯をけゞ〳〵多分は糸の色を損ふ
あきをレレとゝふ汝死してけがをつゝふ止哉〳〵人を
死して名を止む虎い死〳〵皮を止む後世陰徳をゝど
ゝゝゝゝゝゝ及ゝゝゝ禍ひをはゝつんゝゝゝ慎めレレ
一蛹を繭をはゝゝ五日めゝ六日めゝゝ繭乃内ゝ
蛾蛆出るを蛹ゝゝゝ竹木乃雫とゝけるゝ桑を喰
ゝゝのゝひを住居の風景るゝの桑を喰せい繭虫

よ黒子でき蛹よるゝ〜又竹木の雫もうけぞ
風の吹晒〜よゝ〜紀桑ゝ〜養蚕いとせい蛹よる
らげるよ〜實否分明るゝゞ其ゆゝをかゝゞ家よ
ゝ同〜桑を喰〜ゝるゝふ夏蚕ゝは変〜ゝブトにい
なゝゞ但〜糸真綿よもゝゝブトい障りふたゝち
ぞ蚕紙を製ゝるにゝブト出ゝゝい蚕卵無少〜〜
損ゝりよを又ゝゞゝい〜きゝい志ゝゝら〜欠
一大マユ蚕二ッ三ッなるひを四ッも一ッゝまゝ繭一ッ
とはゝる節出來ゝ上糸よをゝりゞ〜是を大

マユゝゝ蔗繭とゝいふ変断よ疎きゞゆゝ合従ゝる
ゝ生ゝゝゞ商人の仲間商内ゝるふ勝利を得ると
紀利をゝるにゆゝるすゝゞ節出來ゝ損を割
ある節出來ゝ終身ゆゝゞゝを断乃甚ゞ紀
なり此外巫を信ゞ家相をゝらゝめ人相をたのゝ
夫妻相尅よゝゝゝゝ類ゝゝゝゆふ〜佳名をゝ〜
ゝゝ物あり是皆変断よゝゝゝ紀失ゝり勝敗い変
断よゝゝゝい孫武子ゞ格言ゝるゞ〜
一大繭を真綿よ製〜上品下品と種々あり其大略

生潰し小綿角綿空綿臂綿等の名あり直段も甚だ格別高下あり又大繭を糸とらせて空糸といふ裏絹ホウ織るものなり繭乃附口を切とふ或を紬組ひも等に製するなり繭の屑をもとりのといふのでくるりとふ着用するなり

一蚕糞を莚百畳分を凡田地二反の屎に充るなり蚕百畳分の繭虫を凡田地三畝歩乃ち肥料のなるなり右蚕糞繭虫宿藁すべて田畑の屎

ふるい利ものなり繭虫乃干るを変種のあり用ゐ捨るものの一品なり一ときに養蚕をいとるむ家に糸屑綿屑絹糸たくさんのなど算當乃外の小物なり中に屑をそろへ或を節紬紬糸入し諸ふ婦人乃らのみのものを下機織あるを手ずからとるを兒女乃着用するを樂しとするなり故に蚕業を百姓乃いとなむ別に一職なるゆふ知りのあるを得ちがひとあるべし其ことい前に十六ヶ國の百姓農業と

いさゝか妨げなきを以て證據とするべし　さきに前篇養蚕絹節乃ち本に日々傳をなすもたゞなるよし此書の画圖をてらし合せて養蚕とさむ嚢中の金銀を探るがごとし家を興さんあるかぎりにあらずなるべし蚕業をいとなむ國々家々豊繁昌なるとこゝに證據とすべし

一蚕紙を製するに繭を採りて後八日めより九日めにいたりて繭より蟻出るをヒイルとなづく尤も卯の刻より辰の刻までに行義正しく蝶出ることと古今時を不變さて數千無量の蟻繭乃ちつゝみ雌雄交合しるを已乃刻までに雌雄をざるゆうにひろげひろく仮に粗紙をうつし其日申の刻で雄蝶をまるしく外に捨雌蝶ばかりを本紙へうつし替酉の刻燈火をうるゝより蚕卵をうつるかりさて其夜の子の刻うぶぎりに蟻を紙より拂ひ捨るなり右斤蚕諸蚕とも蚕紙の製時刻万端一ツとなり其精を手馴ゝ覺ゆるなり

一蚕一ツふく繭一ツと造るおまをクリマユとも小マユと
もいふ極上糸にあるる京都ゑ綾羅錦繡を織ていと
とゝかゝるもの　天子諸侯の國用ゑそるゑまゝ佛
門乃荘厳僧の三衣ゑ用ゆるも養蚕を衣食の重
きを製する濫觴ゆへかゝる教生ゑ国益の
重寶するゑと必せりまるふ愚痴盲昧乃ひとゝ
ゑを殺生の罪ゑりとおりひさだめゝおのをせ
ざるゆゑ他人のゝるゆゑなりさのゝげとるす
るの行り畢竟論ぞるふたゝざるりめりさそまる諸

國乃産物ゑゝそみそるゑすふ上州尾州きゑ丹後
ちりめん加賀絹江州濱ちりめん年々ゑ數十万両ず
國産十目の見る所ゑり此外諸國乃絹紬種々の名
産ゑるすゝいゝゆのらぞ
一古來ゑり其國々乃風俗ゑゝ糸真綿の算法ゑる
どからぞたゝゝを金壱兩ニ付糸目何百何十何匁ゑ
つゝく賣買ゑる國ゑりまる糸目三百目を一把と建
一把ニ付銀何拾何匁何分ゞゝく賣買ゑるものゑり
ゑゝ京都糸問屋筭法を其國々やゝゑろうよゑ

風袋歩引不等ゆゑ紙あつさを畧そたいづれの
算法ともに金銀得失あるべし天下一ありいま此
書ふ著るゆゑんを奥州の糸市又江州長濱ハ東海
北陸兩道乃國々より數千駄の糸荷物京都へ登る
咽首の土地にて諸國仕入の糸真綿賣買算用爰
ふ記す

江州長濱糸問屋賣買算法之支

一金壹兩六拾八匁建一銀壹匁ニ銭九拾六文立　右賣買共
一新糸欠引ニアリ　ニアリ半　譬ハ天秤にて糸目壹貫廿五匁を壹貫目と

一六歩早引糸壹貫目と九百四拾目とハ又壹歩風袋引
一糸掛目何貫何百何十何匁　一代銀ハ何拾何匁何分迄ハ厘ハ捨
一代銀半月延定法但現銀ニ渡せば壹ア引銀百匁ニ壹
匁ツヽ利

仕切覺

一糸壹貫廿五匁但壹貫目也内六拾目早引又拾匁引
正ニ九百三拾匁但銀拾匁ニ糸目廿八匁五分ヶ
内三匁三分問屋口銭引残リ三百廿三匁　代銀三百廿匁三分
此金四両三分

長濱算法斯の如

此竹生
しまの
廻り一里の
小しまなり
竹生嶋

日本三所
辨才天鎮座しまの
又西國順礼の觀音ろう
靈場ふり此めくり
海のふかさ七十
五尋水の色藍をうつす
うひとしまなる此嶋を
うれしがるとなり

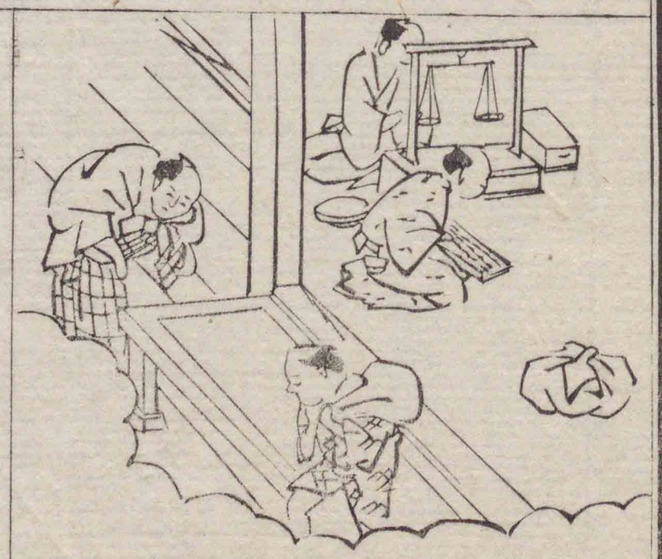
長濱

糸運ぶ圖

ちかの斜めふ小島あり
つかつかう正月吉辰
何某ろう神酒を
そなへ大つるを
りつく小島につるが
來うし事今は退轉せず
まこと嶋のめつらしき
石壁を或人日本一の
景色なりとこそあり
たちまちふかくそ
まうくゆうす
三國一の絶景なりと
いひつるとそうくふ
舟行しとなり

武嶋

ひと絲



江州長濱糸問屋
八軒ふり年中毎
日糸商ひの圖

糸の銘二本松　白天正印　極上糸なり
天天正印　濱付紛印なり
極天正印　凡二割高直なり

奥州福嶋商ひ　濱付紛印　通用糸なり

京飛脚福嶋へ出店　京屋　嶋屋
江州八幡飛脚出店　八幡屋

右三軒より糸荷物引請糸代金何十万兩あて〻糸問屋へ爲替出し糸荷物上方着迄道中遲速ゑ不拘爲替利足金百兩ニ付凡二兩ツヽ荷主ゑ取之
糸一箇掛目九貫目ツヽ馬ゑ四箇付四九三拾六貫目なり
福嶋より京都まで駄賃凡金五兩ヅヽ荷主より取之
荷作り賃一箇ニ付凡貳朱　小二朱　但澁紙兩紙莚縄とも
一駄分凡金三歩荷主より取之　糸問屋口錢金百兩ニ付壹兩ツヽ荷主ゑ取之

○奥州福嶋より例年初糸六月十四日大市ゆゑ先六月十三日の夜より五七里四方の百性糸を持寄り夜あけを待て十四日明六ツ時より糸市賣買ゑ取り四時まで市をなすなり〻二時ばかり糸百駄内外ぜんきん商あり右百駄の糸目凡そ三千六百貫目あり此代金凡そ一万五六千兩ゑ但し金壹兩ニ付濱付紛

おのゝ〳〵糸目凡二百目ゞゝ
ゝ二百三四十目豊山ゝ
ゝゝゞゝ高下あり糸の
賣人ハ數千人ゝゝゝを
糸の善悪を目利〳〵〳〵
一々秤りて糸目をゝゝゝゝあ
代金何両何歩銭何百何拾
文まで壹人〳〵江現銀取
遣賣買ゝゝゝゝ諸國を
ゝゝ〳〵ゝゝふ斯のごゝゝの現
銀大市ハ外ゝゝを受〳〵て
ゝゝ〳〵〳〵一日ゝゝ市ゝゝゝを
斯のごゝ〳〵毎月福〳〵

二本松の糸市商ひハ都ハ
合何千駄糸の多きゝゝ
ゝゝゝ一駄の代金凡百五
六十両ゝゝゝゝゝゝゝゝ例
年奥州糸の大數廣大ゝ
ゝ事代金數十万両ゝゝゝ
知ゝゝゝ〳〵養蚕の繁昌
ゝゝゝゝ〳〵〳〵嗚呼隣の
寶をゝゝゝゝゝゝ一笑ゝゝ
ゝ〳〵

一奥州大隈川といふ大阿を水上白川乃城下の奥より
なづけて出川下を荒濱といふ海邊まで凡そ六拾里餘
の長流あり此大河の両邊洪水度ごとに廣大無邊の
流作となるゆへ其むかしは村里なきすかうに
して経濟まあらかなる人なきゆへ廢地をひらきて
桑をうへ蚕業をひらきに追々風をうつして是を
見習ふ其後享保年中の比予が同郷の商人毎歳二
人つゝあつて一人前より三百両ばかりの金子をなげさく
奥州江おりむき福嶋邊の糸を買なのめしに追々盛

ふるゝ別して本場十八郷乃繁昌なること文化年
中はなはだ今ふるくい養蚕の家一軒前あるも糸
真綿乃所努金三百両ばかりの収納なるもの是ある
福島糸の産物を天下の央ふとゝ例歳數千
駄乃糸京都江のぼる數十万両の代金爲替手形
あつ通達しいさかゝ滞る事あり百姓の女業と
してかゝの産物を天下をつうてなるまで
く其上本場蚕紙乃製其多きこと近世諸國乃商人
買得ふ下る者東山道筋國々千里を遠しとせず

風をうゝ仕入う下る大商を壱人前う蚕紙八九駄ヅヽ小賈を一二駄ヅヽ但し蚕紙千二百枚を一駄とすゝもと奥州本場蚕紙を称し諸國養蚕のをゝすゝ右蚕紙乃濫觴を元文年中のゝゝゝ但蚕種紙を奥州本場ふかぎり其徳ある事を諸國信ゝゝ四方ゝ國々蚕紙商人分配するゝゝゝ

といふことなこのまを吾子うあとをれい自棄の人ふり我
聞千里の道も元を一足已りつめ〳〵より和漢の聖
主千金乃寶をいとひたまふ或を蚕室を建皇后
后妃ふ養蚕をいとなすまを民をみちびきたまひし〳〵數
年の費幾許なりしむ又綾羽呉羽乃二婦人を遠き國
より異朝〳〵機織殿をおしへたまふ其濫觴壱人
習ふ〳〵十人乃師となり十人おのづから百千万人乃
師とふりなまねく代々ふひろまりまぢも其つひへ
莫大なりしも更り聲飲歌舞の御たのしみふなもぢ

おそきなりけり仁君民をいつくしみたまひ
ふるまひ〳〵されば綾羽呉羽の神社を攝州池田の郷
ふ鎮座せり〳〵京西陣數萬軒乃織殿并糸職の人
々講をむすんぢ寄附をふ〳〵年々祭祀の群集千
歳の今ふいまに〳〵退轉なくも知恩報德とつひ
ぢ〳〵

勸農叢書　養蠶絹節巻之下終

明治十七年十一月廿六日出版御届

著者　故人　成田重兵衛

出版人　東京府書肆　穴山篤太郎　東京京橋區南傳馬町二丁目拾三番地

発兌書肆　有隣堂

小野寺文庫
群馬県立図書館
0499803-5